

終末期のキャストの正体とその構成要素 2 一偽預言者とは

4つほど前の記事、「121 ハルマゲドン考察 ー 4 王たちへの召集令状」の最後に、「ダニエル 11:44 の「北の王」を脅かす知らせを届ける「北と東から」の源は、古代ペルシャ王国の現代版である「イラン（近辺）」の元首と、古代メディア王国の現代版であるマスメディアとのチームワークからなる「偽預言者」であろうと考えます。」と書き、注釈として（この古代メディア王国と現代のマスメディアとの関係については近いうちに書く予定である）という趣旨のことを述べていましたので、ここで、そのことについて記したいと思います。

そして、この記事は「125 終末期のキャストの正体とその構成要素 1 一獣の変貌」の続編となります。

その記事の最後でも述べましたが、黙示 13 章の「海から上がる獣」は変貌を遂げ、後半の 3 時半の時点では、「バビロン、メディア・ペルシャ、ギリシャ、ローマ」の全部の集合体となっています。

そしてそのひとつ「メディア・ペルシャ」は当初からメディア王国とペルシャ王国の合体国でした。

これまでの記事で、これが、終末期の「偽預言者」の正体であると書いてきましたが、※この記事では、更にその一方の「メディア」の詳細に迫ってみたいと思います。

（※詳しくは「83 終末期の悪の主役 ー ギリシャの君とペルシャの君」及び「85 反キリストは「シリア」、偽預言者は「イラン」であるという根拠」などの記事を御覧ください。）

「メディア」とはどういう意味かを押さえておきましょう。

メディア [media] と言うのは複数形で、その単数形はメディウム [medium] といいます。

基本的な意味は、「中間」「媒体」という意味です。

ものともものをつなぐ役割をするものの集合をメディアと言ひ、それが現代では一般に、情報媒体という意味で使われ、特に最近では「大衆媒体」という意味の「マス・メディア」と同意語として用いられています。

単数系では美術用語として「媒材 [メディウム] (メジウム)」と訳されています。絵の具（顔料）を固着させたり、顔料同士を結びつける溶剤などを指して用いられています。

この語から派生した言葉に、例えば「中間」という意味の英語は「ミドル [middle]」フランス語では「ミディエ」などという表現や、あるいはステーキの中間の焼き加減を表す「ミディアム」などが知られています。

さて、この「中間 / 媒体」という意味の名称を持つ「古代メディア王国」についてですが、実は、後世ペルシア人との同化が進み混同されて記録され、メディア人に関する情報は非常に限られている上に、自ら残した文献などは見つからないため正確な姿をつかむことが難しい状況にあります。

その少ない情報の中で、あらかじめはっきりしているのは、インドの北で暮らしていたアーリア人がデカン高原とイラン高原に別れて移動し紀元前 10 世紀頃までにイラン高原に定住した集団がその源流であることは確かなようです。

自らをアーリア人と自覚していた彼らが後に「メディア人」と呼ばれるようになったのは紀元前 6 世紀ごろにコルクスに入植したギリシア人たちがその南に広がるイラン高原を「メディアの地」と記したことによるということです。「崇高な民」という意味を持つ「アーリア人」は現代のイランという国号の語源でもあります。なぜ「メディア」と呼ばれたかその語源的な経緯は不明です。

ただ、一つ明らかなのは、メディア時代から「マゴイ」という名の一族が司祭となり「magi—マギ」と呼ばれ、アケメネス朝帝国下でもメディア人のマギたちがそれを踏襲したということです。彼らによる呪術と占術は国政に大きな影響を及ぼしました。「マギ」は古ギリシア語を経て英語の「magic=魔術、呪術」の語源となっています。

この「マギ」はギリシャ語にも取り入れられ、マタイ 2 章にはイエスの誕生に関する記録の中で、その場所を尋ねる人々を東方の「マギ」と記しています。それは「博士」と訳されていますが、その語は「賢者」「天文学者」という意味に変化して用いられていたようです。

しかし、元々このマギ [マゴイ] は、メディア王国で宗教儀礼をつかさどっていたペルシア系祭司階級の呼称です。古代イラン(ペルシャ)において「マギ」は王家相談役、礼拝堂付祭司、裁判官、書記として高度な教育を受けたようです。

このように、「マギ」は長い年月に渡り、諸外国にも影響を与えた、メディア王国の極めて特徴的な文化だったようです。

王の相談役として、将来のことを占ったり、天体の様子から、物事を計画したり、人を裁いたりするというのは昔からどこの国でも見られましたが、メディア王国は、その中でも、特異な存在だったのでしょう。

結局「マギ」は祭司であり、神と人との仲介者です。ですから、彼らが「メディア [媒体] [仲介]」の名で知られたのは、端的に言えば、随一の「霊媒国」という自認、もしくは評判のためであったと考えられます。

メディア王国はペルシャに滅ぼされたもののその後かなりの年月、共同支配という政体であったのは、明らかに「マギ」という祭司職が存続したことがその理由の一つであろうと思われます。

「偽預言者」。「偽」はともかく「預言者」とは神と人との仲介者であり、媒体としての働きそのものです。つまり、「預言者」と「メディア」はその役割としてイコールであると言えるのです。そしてこれが不特定多数の人々に対して為される。まさに言葉通りの「マス・メディア」が終末期に大活躍することになります。

それが偽預言者であるということは、その情報の源なる「神」が「サタン」であることに他なりません。

実質的には、それは「海起獣」のそしてその背後にいるグローバリストたちのスポークスマンとして働くということでしょう。

「マス・メディア」という言葉が出たついでに、「ジャーナリズム」について少しだけ触れておきましょう。

ジャーナリズム [journalism] という英語はすっかり日本語になりましたが、これは「新聞・雑誌・テレビ・ラジオなど時事的な問題の報道・解説を行う組織や人の総体。また、それを通じて行われる活動。」という風に説明されています。

この言葉は、day を意味するフランス語「ジュール [jour]」から派生した言葉です。

元の意味の「日」ということからわかるように、[Journal] はもともと「日毎の記録」という意味でしたが、現在では「日刊紙」という意味にも使います。

ジャーナリスト [Journalist] はジャーナリズム [journalism] の仕事をしている記者や編集者などを指します。

現在では、「日」という原義を離れて、定期的に刊行される雑誌の意味にも使われています。期待はされるでしょうが、その語の本来の意味からいって「真実の報道」「巨悪と戦う」というような正義の味方的な意味合いはありません。

(どれほど、嘘八百、偏向報道や **Netsuzou** を **Heiki** な **Kao** で垂れ流しているとしても、それで飯を喰っているのなら、「ジャーナリスト」と言えないわけでもないのです。)

フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」によると「メディア」という語と密接な関連のある「報道」という言葉について次のような説明がなされています。

『報道 (ほうどう、英: Report) とは、ニュース・出来事・事件・事故などを取材し、記事・番組・

本を作成して広く公表・伝達する行為であり、言論活動のひとつである。報道を行う主体を報道機関、報道の媒体をメディアと呼ぶ。』

「ペンは剣よりも強し」という言葉をご存知だと思います。

『「独立した報道機関などの思考・言論・著述・情報の伝達は、直接的な暴力よりも人々に影響力がある」ということを換喩した格言である。』と説明されています。

アドルフ・ヒトラーもこの「宣伝」の力をよく理解していました。彼の著書『我が闘争』にはこうあります。

『「フロパガンダの芸術とは、まさにこの点にある。すなわち大衆の感情に基づく表象世界を理解し、心理学から見て正しい形式をとれば、注目を集めるばかりか、ひいては広範な大衆の心へ至る道を見出すのである。』

ナチ・フロパガンダを広める際に重要な手段となったのが、書籍や新聞、またラジオや映画といった新しいメディアであった。ナチのフロパガンダで主要な部分を占めたのは、ナチスの映画政策であった。

ナチのフロパガンダを広め、統括するための核となる機関が、ナチ党宣伝局と、政府の国民啓蒙・宣伝省である。』

こうして「メディア」には、その歴史や、今日実際に成功している、表向きは大衆娯楽や啓蒙、天気予報などに見られる注意、勧告、警報などの形を取りながら実質的には、洗脳というべき悪魔的な要素が色濃く染み付いていることが分かります。

イエス・キリストは「偽預言者」に注意するよう繰り返し警告しておられますが、その影響力は大きく、「にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民（聖徒として、十分な知識と識別力を養ったとみなされる人々）をも惑わそうと」（マタイ 24:24）すると書かれています。

ところでパウロは「預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。」（コリント I 13:8）と断言しています。それがいつ止むかは述べていませんが、そもそも、「預言」はある特定の時期に、特別なメッセージを伝えるべきときに「預言者」が起こされ、予言の殆どは一時的に与えられたものであることが、聖書全体の記述から分かります。

イスラエルが神の選ばれた民として存在した時代でさえ、ある時期はまったく預言者はおこされていません。実際、旧約聖書全体に渡る長い年限の間、本物の預言者はごく少数の、名を挙げれば簡単に列挙できる程度の人数しかいません。

一世紀当時も、ヨエルの預言の初期成就時代として、一時期与えられたものです。

「これは、預言者ヨエルによって語られた事です。『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。

その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。』(使徒 2:16-18)

その人々の寿命が尽きた次世代には「預言は止み」ました。そして現代までそのままです。恐らく終末期には再びと言うか、本来のヨエルの預言の成就であるゆえに、聖霊が降り、大々的に神からの正統な「預言者」が起こされることになるでしょう。

これは黙示録にある「二人の証人」と関連があるはずなので、そのタイミングは後半の3時半の時になります。

ですから、終末期は正当な神の預言者と偽預言者との情報合戦という戦いも繰り広げられることになります。

真の預言と偽予言のひとつの見分け方

偽預言は、どの時代にも、ひっきりなしに創出され、むやみにいつでも存在します。

同じことを 100 年以上も言い続けなければならない予言は偽預言と捉えてまず間違いありません。

一方、真の預言は、記録保持されたものは別として、その特徴は、臨時 / タイムリーなものです。

そしてもう一つ、この終末期に起こされる真の預言は、「予言」ではないことを覚えておくべきでしょう。

この時のテーマは「将来」の約束ではなく、今その時にどのように成就しているかを明らかにすることだからです。

「おおいかぶされているもので、現わされないものではなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。」(ルカ 12:2)

という言葉がことごとく実現するときです。

それは、まさに「アポカリプス」「秘密の暴露（覆いを外す）」そのものです。

反キリストの相棒ー「偽預言者＝メディア・ペルシャ」の具体的な動き

古代メディア・ペルシャの主要な働きの一つは、バビロンの滅びによる、神の民の救出でした。

獣軍勢は、大バビロンを大いに利用するために、密約を交わしますが、いずれ裏切ることになります。最終的には残滅を成し遂げます。

その裏切りの始まりは、恐らく相棒 - 偽預言者による、大バビロンの正体暴露でしょう。

大バビロンが「倒れた！」と言われるのは、その支持者の離反による衰退でしょう。

つまり、多くの水の上に座る大娼婦の基盤である「水」を枯渇させることにより、攻略の道筋を作ることです。

これが、古代「メディア・ペルシャ」の行動に対応した現代版（イラン + マス・メディア）が行う行動です。

無論これには、古代の場合もそうであったように、その出来事の発露には神からの意図が関係しています。

「第六の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけた。すると、水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かれてしまった。」（黙示 16:12）

この「日の出るほうから来る王たち」こそ、イスラエルの東に位置するイランの元首たちのことです。

終末期に生じるの多くの出来事は、王たちをハルマゲドンに集めるにしても、獣を崇拝させるにしても、全世界を巻き込んだものですから、そのための実際的な手段も国際的な組織や手段が必要となるでしょう。

今日の世界的な情報ネットワークを司るインターネットの開発と普及は、ほとんどそのためと言っても言い過ぎではないと思います。

まさに「メディア」の働きに負うところは甚大でしょう。

最後にイランについて気がかりな点を付け加えておきたいと思います。

まず、「偽預言者」に関する次の聖句に注目して下さい。

「人々の前で、火を天から地に降らせるような大きなしるしを行なった。また、あの獣の前で行なうことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。」（黙示 13:13,14）

この「天から火を降らせる」という「大きなしるし」によって、「地に住む人々（全地）」に獣の像を作らせることを「命じた」ということです。

つまり、これは全世界の人々を「ビビらせて」命令に従わざるをえないと思わせるほどの重大な影響力を持つ実害の伴う行いに違いありません。

大掛かりだったとしても単にデモンストレーションとして、ホログラムなどの手品的な不思議なことをしてみせたという程度のものであればありえないでしょう。

「天から火を降らせる」というこの表現は、おそらく核爆弾か、すでに開発されているという宇宙空間から地上を攻撃できるという兵器の類でしょう。

ある軍事評論家によればこう書かれています。

「地上攻撃のための宇宙兵器として米国で構想されているのが、“神の杖”と呼ばれる兵器。直径 30cm、長さ 6m 程度のタングステン製、または劣化ウラン製の金属棒を重力加速度を用いて地上に突き刺すことを想定したもので、その速度は時速 1 万 km 以上になり、破壊力は核爆弾に匹敵するとされる。」

ちなみに、デビューしたての復興ローマ獣に、再起不能と思わせるような致命的な負傷を負わせて、10本のうち3本つまり3カ国をその連合から取り除いた後、「北の王」なる反キリストが「小さい角」としてそこに出張ってきて居座ることを可能にする原因がこの「天からの火」攻撃ではないかと思えます。

イランは長距離弾道弾ミサイルの発射実験に成功していますが、つい最近でも(2017/1/30)ミサイル実験を実施しています。

そもそもイランの核開発問題は、2002年8月、イランが秘密裡にウラン濃縮施設を建設していた事実が暴露されたことに端を発します。

同国による秘密裡の核関連施設の建設は核兵器の開発を意図するとの疑惑を招きました。その後の調査により、イランによる過去18年間に及ぶウラン濃縮実験の事実等が報告され、IAEAに対する義務違反が明らかになるとともに核兵器開発疑惑が一層強まりました。

どう考えても、イランは核爆弾とミサイルの開発を進めていると考えられます。

近々、イラン近辺で怪しい地震が起きたら、地下核実験の可能性大でしょう。